



ぼくの耳にくっついて離れない波の音

新学期が始まって最初の授業開き。

国語は、いつもの通り暗唱からスタートしました。

徒然草。

枕草子。

方丈記。

偶成。

四字熟語。

草にすわる。

月の異名。

本気。

走れメロス。

回文。

約3週間のブランクも何のその。

これまでに積み重ね培ってきた学びは、子どもたちの体と心にハッキリと残っているようです。

初回から、澆漑とした元気な声が教室に響き渡りました。

続いては視写です。

こちら、全ての国語の時間で続けてきた大切な学習のユニットです。

どんな物事でもそうですが、「続けたことだけ」が力になります。

反対に言うと、続けていないことは力になりません。

なりにくい、といった方がより正確かもしれませんが、教室で伝える時はできるだけ「クリアなメッセージ」の方が伝わりやすいです。

ですから、「続けた事だけが力になる」くらい、はっきり伝えることが大切ですね。

音読や暗唱と同じくらい、視写というパーツは極めて学習効果が高いです。だからこそ、「たまにやる」のではなく「続ける」ことが大切なんですね。

忘れもの 高田敏子	入道雲にのって 夏休みはいつてしまった 「サヨナラ」のかわりに 素晴らしい夕立をふりまいて	けさ 空はまっさお 木々の葉の一枚一枚が あたらしい光とあいさつをかわしてい る	だがキミ！ 夏休みよ もう一度 もどってこないかな 忘れ物をとりにさ	迷子のセミ さびしそうな麦わら帽子 それから ぼくの耳に くつついて離れない波の音
------------------	--	---	--	--

今回は、教科書のこの詩を視写しました。

今の時期にぴったりの作品だといえるでしょう。

心を落ち着けながら、まずは書き写しました。

静寂の中に、「カリカリ・・・」という鉛筆を動かす音だけがかすかに聞こえます。

教室自体はすごく静かですが、確かな熱が伝わってくる瞬間です。

こういう空気が自然と作れるようになってきたことも、みんなの心の成熟度を表していますね。

写し終わった子から、いつものように「覚える練習」に移ることとしました。

既に、指示が一切なくても、どの子も写し終えたら自然とぶつぶつ呟いて覚え始めるようになりました。

私の指示が不要になると、一体何が起きるかという「隙間が消える」のです。

私が指示を出している間は、子どもたちの活動が止まっている時間です。

ですから、極力そうした瞬間は減らしていきたいし、できるなら無くしていきたいと思っています。

それが、すでにいくつもの学習で可能になってきました。

たくさんの熱を学習に注げるようになると、さらに成長は加速します。

これは、とても自然な帰結です。

しかるべき原因があって、しかるべき結果が生じます。

学びに熱を注ぎきることができたなら、それに見合った成果が返ってくるということです。

全員が先ほどの「詩」を写し終えた段階で、次に移りました。

まずは、色んなバリエーションで読みました。

追い読み、交代読み、タケノコ読み、指名なし音読…。

全員で勢いよく声を出していると、自然とみんなの表情が笑顔になってきます。

「声を出す」という能動的な営みが、体や頭を一気に活性化させてくれるのでしょ。

教室全体の熱が一気に高まったところで、読解のパーツに入りました。

簡単な問題から順にテンポよく出題しつつ、ノートに答えを書かせていきます。

○題名は何ですか（忘れもの）

○作者は誰ですか（高田敏子）

○季節はいつですか（夏）

読解の基本は、「情報の抽出」です。

こうしたごく簡単な問いから少しずつステップアップしていくことで、読解の基礎が身についていきます。

続いて、次のことを問いました。

○天気は雨ですか。それとも晴れですか。

「夕立」という言葉に引っかかった子は「雨」を主張。

それに対して、「晴れ」派の子たちからは、「雨は上がっているよ。だって『けさ、空はまっさお』って書いてあるから」と応じます。

これを問うことで、「雨が過去のもの」「夏休みの出来事」であったことが分かります。

続けて、次のことを聞きました。

○話者は、男の子ですか。それとも女の子ですか。

ちなみに「話者」とは、物語や詩を語り進めている人のことです。

作者とは別に存在するものです。

「吾輩は猫である。名前はまだない。どこで生まれたかとんと見当がつかぬ」の冒頭で有名な『吾輩は猫である』なら、作者は「夏目漱石」で話者が「猫」ということです。

今回は、作者は「高田敏子さん」という大人の女性。

それに対して、「ぼく」という記述から話者は「男の子」であることが推定できます。

そして、次が本丸の問いです。

○今、話者に見えているものは何ですか。

思いつく答えを全てノートに書いていくこととしました。

出てきた意見は以下の通りです。

- ・入道雲
- ・夕立
- ・木々の葉
- ・光
- ・空
- ・セミ
- ・太陽
- ・麦わら帽子
- ・波の音

これらを全てホワイトボードに書き出し、次の指示を出しました。

○この中で「絶対に違う」と思うものを一つ選んで反論を書いてもらなさい。

この指示で、子どもたちは一気に燃えました。

この後、子どもたちは大反論大会へと移っていきます。

最初に狙い撃ちにされたのは、もちろん「波の音」でした。

「波の音だけは絶対に違います。」

「波の音は見えないです。」

「音は見るものじゃなくて聞くものだからです。」

こうして、全員が違うと確認できた意見は、一つずつ消していくことにしました。

そして、音の次にターゲットになったのは「光」でした。

教室は、完全に真っ二つに分かれます。

「光は見える派」と「光は見えない派」の激突です。

両者、一步も引かない熱い戦いはチャイムが鳴っても止まりません。

休み時間になっても、そこかしこで互いに討論し合う子どもたちの姿が見られました。

続きの展開が楽しみです。(討論にはぜひお家の方々も気軽に楽しく参加してみてください。お子さんとお家で話してもらえただけで、教室での討論が一気に盛り上がります。「うちのお母さんはこう言ってた!」という激論が展開されていくようになるからです。)



(明日の 4 時間目の道徳、おすすめなのでお時間ある方はぜひ教室にお越しくださいね。)

☆↓**読者ページはこちらから**↓☆**ご意見ご感想など気軽にお寄せください**

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcipcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

